

今年の上智大学夏期神学講習会(7月29~30日)の第2日に、イエズス会の酒井陽介神父の『ヘンリー・ナーウェン — 壁を越えて、つながる人 —』という講義がありました。(Henri Nouwen という名前の日本語表記は、「ヘンリ」・「ヘンリー」、「ナウエン」・「ナーウェン」などあります。この『塾』では「ナウエン」で統一します。) 講習前に送られてきた2日間8講義の予定表の中に「ナウエン」という名前を見つけ、いちばん楽しみにしていました。「いつかはナウエン師のことを『塾』で取りあげたい」と考えていたわたしにとって、今回お話しするきっかけを与えてくれた内容でした。酒井神父の資料から、ナウエン師の略年譜を紹介いたします。

1932年 オランダの伝統的カトリック家庭の4人兄妹の長男として誕生。

1957年 オランダ・ユトレヒト教区司祭として叙階(㊟1)。

1957-66年 オランダやアメリカで心理学の研究。

1966-85年 北米の大学(ノートルダム、イエール、ハーバード)で神学・心理学を講じる。

1974/79年 競争激しい大学の雰囲気疲弊し、それぞれ約半年間、トラピスト会(㊟2)のジェネシー修道院に滞在し、祈りと労働の時間をもつ。

1985-86年 ジャン・バニエ(㊟3)との出会いを機に、フランスのラルシュ共同体(㊟3)に滞在。

1986-96年 カナダ・トロントにあるラルシュ・デイブレイク共同体でチャプレン(㊟4)を務める。

1987-88年 神経衰弱を患い、しばらく治療に専念。

1996年9月21日 滞在先のオランダで心臓発作のため帰天。64歳。

【主な著作】(多数ありますので、わたしがお勧めする本だけ挙げます。)

『静まりから生まれるもの』、『明日への道』、『嘆きは踊りに変わる』、『イエスの示す道 受難節の黙想』、『友のためにいのちを捨てる 奉仕者の霊性』、『心の奥の愛の声』、『ナウエンと読む福音書 レンブラントの素描と共に』、『今日のパン、明日の糧』など、多数。

(㊟1) 位階制の職制を有するカトリック教会において、「助祭」・「司祭」・「司教」の職務に就かせる儀礼のことです。

(㊟2) 正式名称は「厳律シトー修道会」。観想生活・荘厳な典礼・神学研究・労働を重んじます。男子トラピスト会は1896年来日、北海道上磯町など2か所、女子は1898年来日、函館など5か所に修道院があります。

(㊟3) ジャン・バニエとラルシュ共同体：ジャン・バニエはカナダ生まれ。大学で神学と哲学を学びました。1964年知的ハンディがある二人の子どもと出会い、小さな家に引き取って「ラルシュ(フランス語で『箱舟』)共同体」と名づけ、共同生活を始めました。ラルシュ共同体は現在、世界に100か所以上設立されています。

『愛するとは、その人の存在を喜ぶことです。その人の隠れた価値や美しさを、気付かせてあげることです。人は、愛されて初めて、愛されるにふさわしいものになります。』(Jean Vanier)

(㊟4) 学校その他の、教会以外の施設における礼拝堂で奉仕する聖職者のことです。

今回は、ナウエン師の『放蕩息子の帰郷 父の家に立ち返る物語』という本を参考に『ルカ』15章を読み直します。これはナウエン師が、〈光の魔術師〉とも呼ばれたオランダの画家・レンブラントが描いた『放蕩息子の帰郷』の一部を複製したポスターと出会い、その後の『霊的探究の長い冒険を始めるきっかけとなった』と自ら告白している本です。『ルカ』15章11~32節を、ナウエン師がどう読み解いていったかをみていきたいと思えます。そこには、「あなた」と「わたし」も出てきます。

「家」を「出る」とはどういうことか

きょうは『放蕩息子のたとえ』を『山浦訳』で読んでみましょう。

11 またイエシューさまはこんな話もなされた。「ある人に息子が二人あった。12 弟が父親にこう言った。『父さん、跡式(遺産)のわたしの取り分をわたしにくださりませ。』それで父親は息子たちに財産を分けてやった。」(これはこの国の習いにて、父の財産は息子らが分けあって相続致す。ただし息子の数に一つを加えた数で財産を等分し、長男はその二つを受け、弟たちは一つずつを受けるのでござる。父は息子の申し出があれば、いつでもその者の取り分を与えなければならない決まりでござった。ただし、相続権の行使は一度限りでござる。)

13 それから間もなく弟はその貰った跡式をすべて銭に替えて、遠い国へ旅に発つてござる。そうしてそこで放蕩の限りを尽くして遊び暮らし、ザブザブと湯水のように銭を使ったのでござる。

()内は山浦玄嗣先生の補足文です(『ガリラヤのイエシュー』では、地の文などに「幕末期の日本語風」の言葉が用いられていますので、「~でござる」という表現が使われています)。前回の『「長男」はほかの兄弟の2倍の遺産を受けとる権利をもっていた』というわたし(あるいは、高価な注解書)の説明などなくても、当時の遺産相続のきまりがわかりますね。ここが『山浦訳』のありがたくも、すばらしいところです。

父の財産をもらった弟息子は「遠い国」へ旅に出ました。福音書記者ルカはそれを簡潔に、というか、あっさりと言っています。「あっ、そうなの…」で次の文に目がいてしまいます。彼が何を目的に旅に出ることを選んだのか、父がそれに対してどんな気持ちを抱き、息子に何を語ったのか…など、「大切なんじゃないの?」と思われることはまったく書かれていません。しかしここには、ふかい意味が隠されていました。ナウエン師によれば、「家を出る」という行為は『もっとも侵すべからざる伝統を傷つけ、侮辱し、徹底的に反逆すること』になります。それは自分が生まれ育った「家」を、自分がその一員であった「地域(共同体)」を、さらにそこに息づく「伝統」を拒否すること — つまり、長い間受け継がれ、手渡されてきた生き方、考え方、そして行動のしかたに自ら縁を切ることを意味します。『わたしの存在の中心』である「家」を出て、『遠い国』すなわち、自分の『故郷で聖なるものと見なされてきたすべてを無視する世界』へ旅立つことなのです。

「家」の中で語りかける「愛の声」

ナウエン師は「家」こそ自分の本当の住まい、安住の地であるといい、そこは『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』(『ルカ』3-22、『マタイ』3-17、『マルコ』1-11)という「神さまの語りかけを聴くことができる場所」なのだと考えます。自分が「愛されている」という実感をもって過ごせ、つらいことや悲しいことがあっても励まされ、慰めてくれる存在が一緒にいる「家」。ナウエン師自身も「私の愛する子、…」という『聞く者につねに命と愛を与え続ける声』を『聞いたことがある』と書いています。しかし同師は、『それでもわたしは、何度も何度も家を出た』と告白しています。さらに『自分の内に弟息子がいる』ことも認めざるを得ない、という驚きの言葉もあります。

ナウエン師は数多くの著作を発表し、世界中の人たちに神さまの愛や希望を伝えることができる人物として知られています。略年譜にもあるように、北米を代表する伝統的なカトリック大学であるノートルダム、その名を知らない人はあまりいないイエール、ハーバードというプロテスタント

のエリート校の教授としての業績もあります。そこから得た名声・称賛・榮譽は大きいものでした。しかしそれゆえに、「もう一つの声」も彼の耳に聞こえていたのです。

もう一つの「魅惑的な声」が …

ナウエン師は、「声」はほかにもたくさん聞こえてきたといいます。『出て行って、自分には価値があることを証明せよ』という『約束をいっぱい並べたてた、とても魅惑的な声』が …。

ナウエン師は厳格なカトリック家庭の「長男」として生まれました。学校では自分と同じような学業優秀な友に囲まれていました。権威ある大学のすばらしい先生方にも恵まれました。著作物が好評を得てマスメディアにも取り上げられました。そして「その声を幼いときからずっと聞いていた」といいます。具体的にその「声」とは何だったのでしょうか。

「いい子であることを示しなさい。」「成績はどうなってる？ 友だちより〈上〉であることはいいことだ。」「あなたなら一人でうまくやっていける！」「きちんとした人脈はあるかい？」「この多くのトロフィーで、あなたがどんなに優秀な人間かわかるよ！」「弱みを見せるな、つけこまれるぞ！」「何も生み出さないなら、だれからも相手にされなくなるぞ！」…。

これらの忠告や助言は人々の「善意」から出たもので、「愛する子よ」と語りかける声に耳を傾けている限りは何の害も及ぼしません。しかしこの呼びかけを忘れてしまうと、怒り・恨み・嫉妬・食欲・敵意・ライバル意識 … が、自分を「遠い国」に引きずり出してしまう — と、ナウエン師は自らをふり返っています。

人間はだれでも他者から嫌われたり、無視されたり、軽蔑されたりするのはいやです。恐れています。だからなんとか自分という存在を守ろうとします。「自分は努力したのだから …」と、受けて当然だと考える愛や評価を獲得・維持しようとして。そして「さらにもっとたくさんの称賛を受けたい」と望みます。ナウエン師は、この心情こそが『こうして、わたしは父の家から遠く離れ、「遠い国」に住むことを選』ばせることになったと述懐しています。

「この世」の愛は、「条件つき」

ナウエン師は、「認められたい、人々から愛されたい」という〈この世的な考え〉は、ちょっとほめられるとやる気が出て、小さな成功でも気分が高揚する一方、些細な批判に対しては怒り、ちょっとした拒否に敏感になって落胆する … という経験をもたらし、『わたしはまるで大海に浮かぶ小舟のようだ』ったと書いています。自分の人生を「自分が何者であるかを定めるのは、この世界だ」という誤った考えからくる不安でいっぱいの闘いだったと回想しています。なぜ、このような闘いを強いられたのか — それは『この世界は「もし … なら」という、たくさんの条件をつけるからだ』と断定します。たとえば、こんな条件を —。

自分の問い：「あなたは、私を愛していますか？ ほんとうに愛していますか？」

この世からの声：「愛していますよ！」

— 「もしあなたが、イケメンでかっこよく、スポーツ万能で、お金持ちなら。」

— 「もしあなたが、有名大学を卒業して大企業に就職し、その能力を発揮し、多くの称賛を受け、立派な人脈をもっていれば。」

— 「もしあなたが、その仕事の成果を今後も維持・発展させ、たくさんの人たちの尊敬を得ることができるなら。」

— 「もしあなたが、とてもやさしく、包容力があり、人間的魅力にあふれているなら。」

この世の愛は、すべて「もし … なら」という〈条件つきの愛〉なのだといいます。しかし、こんな愛にほんとうの自分を探し求めている限り、その人は「この世の愛の声」の誘いにのっては失

敗し、何度も同じことをくり返すのだと、ナウエン師は自分の経験をもとに述べています。この物語の弟息子にも、この「魅惑的な声」がささやいたのです。「お金」という「この世」が求めるもっとも魅力的な「条件」をたずさえて …。

「父」のころ

父親はなぜ、弟息子の願いを聞き入れたのでしょうか？ ナウエン師によれば、『たとえ息子が命を失う危険があっても、子に自分の人生を歩ませようとしたのは、愛ゆえであった』からです。父親としての愛を息子に無理強いすることはせず、たとえそれによって息子だけではなく、自分自身も痛みにさらされるとわかっていたとしても、その「愛」ゆえに息子を家に留め置かなかつたのだと。「父」、すなわち「神さま」は私たちを愛するがゆえに、自分の痛みも省みることなく、「子」の自由を認めてくれます。ナウエン師は、『ここに人生の神秘が姿を現わす』といます。私たちは父から愛されているがゆえに家を出ることができ、その後私たちに多くの苦難や危険が待ち受け、それによって人間としての道に迷い、自分を見失い、罪を重ねようが、それでも私をふたたび受けとめるために腕を広げつづけ、いつも私を捜し求め、『あなたはわたしの愛する子』と語りかけ、私が「家に帰る」のを待っているのが「父」なのです。

わたしの「家出」

わたしも家出しました。東京・目黒区～埼玉・草加市～東京・三鷹市と 11 年間、家を空けました。でも私の家出は、父親がお尻をたたいてくれたからです。父は俳句をやっている、その先生が水原秋櫻子先生で、『馬酔木』という俳句雑誌を主宰をされていました。水原先生は「獨協学園」～「一高」～「東大」医学部を卒業したお医者さんでした。父の先生に対する尊敬の念は、わたしが杉山好先生に抱いたものより大きかったかもしれません。「水原先生と同じ道を息子に歩ませたい」という気持ちがあったのは容易に想像できます。大きな期待をもって送り出してくれたわけです。その結果は第 53 回をお読みください …。しかし、期待を裏切ってしまったのは、「放蕩生活」をしたからではありません！ だいいち、それだけのお金がありませんでした。「あつたら、どうだった？」ですって？ ワカリマセン。が、遠藤周作さんの『沈黙』や『わたしが・棄てた・女』を読まなかったら、どうなっていたか …。わが家がお金持ちでなかったことに感謝です。仕送りが届くまでの一週間、「獨協ランチ」（たしか、120 円！ 麺類を除いて学食でいちばん安かったメニュー）と「ラーメン・ライス」（ご飯とインスタントラーメン）、あるいは「具なし」の味噌汁をご飯にかけて食べた日も何十度か（「何度か」ではありません！）ありました。でも、すばらしい先生やすてきな友達に出会う恵みをいただき、たくさん「わたしにしか手に入らないお土産」をもって家に帰ることができました。大した家出ではありませんでしたが、わたしの人生にとって忘れられない貴重な旅でした。次回は、弟息子の「帰郷」についてお話いたします。

神さま、私たちの人生は、天使ガブリエルが『主はあなたと共におられる』とマリアに告げたように、いつもあなたに支えられています。あなたからいただいた今日という一日を、感謝と祈りのうちに、あなたと兄弟姉妹に仕えることができますように。

(2017.09.04.)

【引用・参考にした書籍など】

- ・ヘンリ J.M. ナウエン 『放蕩息子の帰郷 父の家に立ち返る物語』（あめんどう、2003）
- ・山浦玄嗣 『ガリラヤのイエシュー』
- ・大貫 隆 他 『岩波 キリスト教辞典』
- ・ジャン・バニエ 『ラルシュのころころ — 小さい者とともに、神に生かされる日々』（一麦出版社、2001）
- 『コミュニティ — ゆるしと祝祭の場』（一麦出版社、2003）